

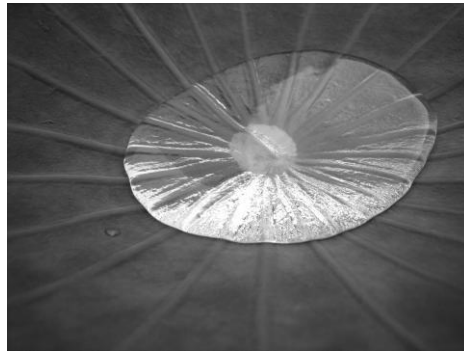
「いわんや悪人をや」

藤元正樹師述

この前、別府へ行っただけです。二十年前とは大分違っていました。そこに海地獄というのがありますね。その池に、印度の水蓮がたくさんうわっていました。赤とか、黄とか、紫とか、実にきれいでした。青い蓮華はありませんでした。青い蓮華とは何をいつているかというところ、葉っぱなんです。蓮華の葉、それで蓮台というけれど、又は百葉華というんです。百の葉っぱ、その蓮華をもってお浄土を表わしているんです。お浄土を何故、蓮華で表わすかというところ、いろいろ理由はあるんです。宿根草木、宿根、根っこ、この根っこが大事でしょう。蓮華というのは。私達でも生きていくということは、根っこをもっているんです。生活しているのは表面だけ。花でも根っこがあるでしょう。花がきれいだといって、切つていけたら三日ほどしたら枯れる。しかし、根っこは枯れないでしょう。枯れないものを根っこというんです。何か此の頃、皆この根っこを忘れていくんです。花ばかり大事にして、根っこがあるのを忘れていくんです。上ばかり気になっていくんです。そこには根は見えないですね。これを蔵というんです。「ぞう」ともいいます。隠蔽といって、目に見えない部分をいうんですが、此の頃は目に見える部分だけを大事にしているんです。根っこを養うことです。根っこをほったらかしておいて、花ばかりを大事にしたって、そんなもの枯れてしまったらしまいです。本当の命を支え

ているものは、この根でしょう。私達は目に見えていない部分しか考えていないんです。目に見えない部分を忘れてしまっている。この目に見えない部分を指摘するのが宗教なんです。宗教の領域というのは、根の問題です。目に見えない部分です。目に見える部分だけを考えているのだったら、その部分だけをきれいにしている世で成功しさえすればいいという事です。す。

ところで、根の事を宿根といえます。普通、お浄土へ行ったら、蓮の花が咲いているように思うでしょう。だけど花はないですよ。お浄土へ行ったら葉っぱばかりなんです。目に見えないのは、八万四千の葉っぱに、時として一輪の花があると。花が少ないんです。あるのは葉っぱばかり。ところが、葉っぱばかりなのに光っているというんです。それは何故かというところ、人間の目からみたら、蓮華の値うちがあるのは根っこか、花です。花なら売れる。お盆だけですが、蓮華はいつでも売れます。人間の目から見たら、葉っぱは何の役にもたないんです。しかし、蓮華そのものからいって、あの葉っぱが命のもとですよ。葉っぱなくして、花も根っこ



も育たないんです。本当は花や根っこを育てているものは、葉っぱです。だから、いかに葉っぱが大事かということなんです。だけど人間の目から見たら何の値うちもない。しかし、それは人間の娑婆の値うちです。葉っぱみたいなものは売れもしませんね。そこで枯らすしかない。だけど、よく考えてみたら、その葉っぱが蓮華そのものにとっては値うちをもっているんです。

ですから、人間が生きているという事は、それはそのまま一つの価値をもって生きているということなんです。生きている限り、値うちをもって生きているんです。その値うちに、いいか悪いか、それに無記という事があるんです。これは一般的にヨーロッパ感覚では考えられない。仏教独特のものです。

そのことで浮かびますが、天親菩薩。その天親菩薩という方は、千部の論師と言われた方で、仏教二千年の歴史の中でこれほど学者だった方はないといってもいいくらいな人です。

皆さん方が知っている言葉で、桃栗三年、柿八年というでしょう。あれはもとも、唯識三年俱舎八年という言葉からきています。俱舎論は小乗の論、唯識論は大乗の論ですけど、唯識論は天親菩薩の論拠です。ですから、唯識は三年、俱舎は八年勉強しなければわからないというんです。私等は三年ぐらいではわからないけれども、それからきたのが桃栗三年柿八年という言葉なんです。その論には、細かく人間の気持ち・心を扱っているんです。人間の心、その心には筋があるんです。心には心の、身体

には身体の筋があるんです。法という言葉自体、元来はインドではグルマと言っていたんです。グルマは習慣ということです。

仏教は神様はたてませんよ。皆さん方は仏様に救われるように思っているけれども、仏様は救ってくれませんか。そんなことを思っていたら、大きな間違いですよ。神様がでてきて、あなた方を救ってくださいるというような、そんな無茶な話はないんです。それは奇蹟です。キリスト教でいう奇蹟です。

仏教は法をたてたんです。法というのは、因果の法、果は仏様になる事、因は私達衆生。人間が仏になる。仏様は、因は人間、人間が仏になる。因と果をもっているのが法。仏様が私達を救うのと違うんです。親鸞聖人は、仏を信する者が、その信心によって救われると言ったんです。仏を信する心が信する人を救うんです。仏様がいくら功德をもっているても救われません。神様に、因果はないんです。初めから神様です。仏様はそうではない。人間が仏様になるんです。あなた方が仏様になるんです。そして、法というのはそれはどうやってなるのかというのと、習慣です。くり返すことです。覚えてわかったとしても何にもならないんです。

最近、若い人は猫も杓子も大学へ行くでしょう。大学へ行つて、いろんな事を覚えてきて賢くなりましたが、果たして、人間として良くなつたと言えるかどうか。理屈は賢くなつても、人間が良くなつたかというのと、悪くなつたでしょう。覚えるという事は知識です。仏法を聞いて教養はできる。だけでも仏にはなれませんよ。

善導大師は百千の毛孔という言い方をして、仏法は百千の毛孔から入るんだと。毛孔から入るといふのは、どういうことかというのと、くせになるということ。習慣になることです。みんな物事は習慣です。国家といたつて、社会といたつて、みな習慣です。習慣がつくりあげたんです。だから、習慣というものは恐しいものですが、また同時に、それが人間をつくっていく。人間をそのようにしていく力をもっているんです。ですから、人間の習慣というものは、もともとインドではグルマというんです。グルマというのはその意味なんです。習慣が人間をつくるんです。それを中国へもってきたら法になつたんです。法爾自然といいますが、インドのグルマを翻訳して、中国で法にしたのです。法という言葉にしたのには随分苦労があつたのですが、よく考えてみてみたら、わざわざインドのグルマという言葉が翻訳しなくても、中国には自然という言葉があつたのです。自然という言葉は習慣。いちいち覚えなくても自然にそうなつていふという事でしょう。それが習慣です。それを自然ともいふんです。

それを日本へもってきて、一番最初に法という言葉を使つたのが聖徳太子です。聖徳太子は法を軌持と翻訳された。軌(わだち)というのは轍。つまり、車の通つた後。車の通つた後は何かという道になつていふということ。心法からいへば、道は道理。だから、法という言葉一つがいろいろ変化してきた。日本では、道は道理に変化してきた。道理ということも大事なんです。皆さん方が仏になる、弥陀の本願

を信じ、念仏申さば仏になるという、仏となる道理、道理とは皆がいやといふんことが道理というんです。自分だけがそうだといつていふのは道理ではない。万人の人がそうだと言へるのが道理。だから、道理というものは、権力であろうと、人間の力でゆがめるわけにはいかんもの。もつと簡単にいへば、人間の思いで変えることのできないものを道理というんです。例えば、人間はこの世に生まれ、年をとり、病気になるって死ぬということ。あなた方には生老病死ということがあつていふでしょう。これは道理なんです。これは四苦といひますけれど。考え違ひしてもらつて困るのは、お釈迦さまが一番最初に説かれた教えを四聖諦といひ、その第一を苦諦といふんです。苦諦といふのは、人生は苦なりと悟れど。人生は苦と。これが教えなんです。お釈迦さまは樂を教へられたのと違ふんです。よ。人生は苦であるを教へられたのです。人生は樂であるといふような顔をしていふ人は、お釈迦さまの心がわからんということ。時には楽しい事もあります。全体を通して、自分の人生を考えてごらん下さい。人生が苦であるといふ事がわかるでしょう。それが、わからぬのが天人といふんです。空の上を飛んでいふのです。人間の上の人、あなた方もかつては天人だつたんです。若い時は。生まれた時からそんな顔ではなかつた。天人を見てみ下さい。手に花をもつて、笛をもつて、太鼓をもつて、楽しんでいふでしょう。足が地につかん。その天人が落ちてきて、落ち着いてしまつたんです。もうあがれない。